オプション教材（きょうざい）ツゲ　暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

暗唱長文 小４ 10月　　笑った赤べこ

1「ああっ。」
私は、目を疑いました。石井君の指は、小さな赤べこをつまんでいました。赤べことは、福島県の郷土玩具で、「赤いべこ」つまり、赤い体をした、牛のことです。首が振り子のようにゆらゆらゆれる、とてもユーモラスな格好の牛です。2私の赤べこは、キーホルダーになっています。それをランドセルに下げていました。石井君はふざけて触って遊んでいたのですが、何かの拍子にはずれてしまったようです。いっしょにいたさやかちゃんが、あわててつけ直してくれようとしました。3しかし、赤べこの背中についていた輪っかが折れていて、もうチェーンとつなげることができなくなっていました。石井君は、いつものいたずらぼうずの顔から、びっくりした顔になって、
「ごめん。取れちゃった。」
と言いました。
4この赤べこは、私が一年生のとき、福島のおばあちゃんが送ってくれたものです。私の赤いランドセルにぴったりだったので、一年生のときからずっと、お守り代わりにつけています。私の大事な大事な宝物です。
5でも、私は、石井君がわざと壊したわけではないと知っていました。私は、なるべく明るい言い方で、
「あ、いいよ。これ、たぶんもう古くなっていたんだ。」
と言いました。石井君は、少しほっとした顔になりましたが、もう一度、
「でも、ぼくがひっぱったから……。」
と、小さく言いかけました。6私は、
「いいの、いいの。気にしない。そういう運命だったんだから。」
と、元気に言って、赤べこを手に取りました。
壊れた赤べこに目をやると、赤べこは、のんびりした顔で、手のひらに横たわっています。7じっと見ていると、不思議なことに赤べこが少し笑ったような気がしました。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「まあまあ、そんなにしんべ（心配）しねえで。」
そんな牛の言葉まで聞こえた気がして、ふと顔を上げると、石井君もじっと赤べこを見つめています。私たちは、顔を見合わせて、思わずくすっと笑いました。
8その日、私は家に帰ってから、お母さんに、壊れてしまった赤べこを見せました。お母さんは少し驚いた顔をしましたが、事情を聞くとすぐに納得してくれました。そして、赤べこを見ながら、
「石井君、気にしていないといいね。」
と言いました。9私は、牛の声を聞いたんだから大丈夫、と心の中で思いました。
お父さんが帰ってきたら、たぶんうまく直してくれるでしょう。今度、福島のおばあちゃんの家に行くときに、元気になった赤べこを一緒に連れていくつもりです。0

（言葉の森長文作成委員会　ゆ）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

暗唱長文 小４ 11月　いとしのイタリアン

1「ごはんですよ。」
キッチンから、お母さんの声がしました。ソースを煮込むので、そのにおいでとっくにメニューはわかっています。だから本当は勉強していることになっているけれど、ぼくは気もそぞろで、今か今かと部屋のドアを開けて待っていたのです。

2和食、中華、洋食、エスニック、日本では外国に行かなくても、各国の料理が楽しめます。お店で食べるだけでなく、いろいろな食材が売られているので、家でも食べることができます。なんて幸せなのだろうと、ぼくはごはんのたびに思います。

3ぼくが特に好きなのは、イタリアンです。オリーブオイルとガーリックの香りや、トマトの酸味、複雑なハーブの味わいなどがぼくの五感を刺激します。中でもパスタ類は特別で、何もない時は、めんをゆで、オリーブオイルとパルメザンチーズだけで食べられるくらいです。

4今夜は、野菜もたっぷり入れたスペシャルミートソースです。ぼくは、フォークにスパゲティを巻きつけながら、うっとりと、
「どうしてこんなにおいしいのかなあ。本当に毎日でも食べたいよ。」
と言いました。

5すると、
「啓介は、お母さんのおなかにいるときから、スパゲティが好きだったからね。」
実はこの話は、毎回繰り返されるのですが、お母さんは話したことなど、すっかり忘れて、まるでそれが初めてのようにいつも不思議そうに語ります。

6「お母さんはずっと和食党だったのに、どういうわけか、啓介がおなかにいるとき、調子が悪くてもミートスパゲティだけは食べられたの。毎日でもいいくらいに。」
そこで決まって、妹ののり子が、
「その話、何回も聞いた。」
と言います。

7半分くらい食べた時点で、お母さんが立って、おかわりの分のめんをゆで始めます。ぼくは、たくさん食べるので、二回に分けないとめんが伸びてしまうからです。
「アル・デンテでお願いね。」
ちょっと生意気に、そうオーダーします。

8ぼくは、ちょっと固めのゆであがりが好みです。最初は、柔らかいものだと思っていたのですが、いとこのお姉ちゃんといっしょにビストロに行った時、「絶妙な歯ごたえ」のアル・デンテという状態が最高なのだと教えてもらったのです。

9友だちに人気があるのは、焼肉、お寿司、カレーというラインナップで、イタリアンなどという子はあまりいません。でも、本当においしいので、いつかイタリアンシェフになって、子どもにも人気のあるお店を作りたいと思っています。そんなことを考えながら、ぼくはおかわりしたお皿を両手で受け取りました。0

（言葉の森長文作成委員会　θ）

1「浅野たちのチームは今、燃えている。」
　山口先生の声が教室に響き渡った。今日の朝の会で、私たちDチームはみんなの前でほめられた。私たちの学校では、四年生になると女子はミニバスケットのクラブ活動があり、毎日放課後、体育館で練習をしているのだ。
2Dチームは、上から四番目のチームで、公式試合には出られない。練習の時も、ゴール下はなかなか使えず、パス練習が多い。Cチームを負かして、自分たちがCチームになれば試合に出られるのだがその壁は厚かった。
3チームの五人のうち、三人は
「どんなにがんばったって、試合になんか出られないし。」
「先生もコーチも、A、Bチームばかり力を入れているみたいだし。しかたがないけど。」
という感じで、なんとなくやる気が出ない様子だった。
4キャプテンである私と、副キャプテンのみちるちゃんは、何とかがんばってCチームに昇格したいと思っているけれど、チームワークが今ひとつなので、うまくいかないのだ。私たち二人しか来ない日もあって、Eチームに混じって練習試合をしたくらいだ。5私も少しあきらめかけていた。
　ところが、先月のことだ。みちるちゃんが、
「ねえ、このままじゃ、いつかEチームにも抜かされてしまうかも。がんばって、朝練しない？」
と言い出した。みんな一瞬、えーっという迷惑そうな顔をした。
6しかし、みちるちゃんはひるまず、強い意志のこもった目でみんなを見つめ、
「私たちだって、試合に出たいよね？」
と問いかけた。私が思わず、大きくうなずくと、他の三人もつられたように首をたてにふった。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

　次の日から、三十分の朝練が始まった。7三十分早く来るのも実は大変だ。特に朝が弱い私とふくちゃんは、朝ごはんもそこそこに、髪の毛がはねたまま走って登校するようなあわただしさだった。
「朝練前にランニングしちゃうようなものだね。」
　誰もいない早朝の体育館は、すべてが私たちのものだ。8シュート練習が思う存分できるし、ドリブル練習も何本もできる。声が響くのでいやでもテンションが上がっていく。一日目にして、私は、これはいけるかもしれないと思った。なんだか昨日までのDチームではないみたいだ。
9翌日からは、山口先生がのぞきに来た。あいさつだけすると、体育館の入口で黙って見ている。ふくちゃんのロングパスを取りそこねた私に、先生は転がったボールを拾うと、強めのチェストパスで渡してくれた。0

（言葉の森長文作成委員会　θ）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34